

余野十三仏

分類 多尊石仏
年代 永禄七年（一五六四）
所在 余野中所



【裏面】



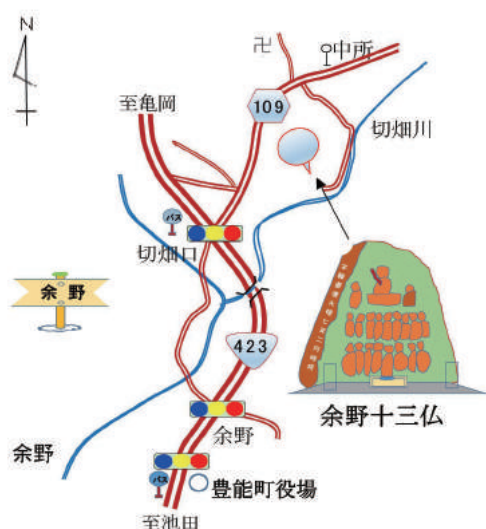
【表面】

切畑川の十三橋の傍らにこの石仏がある。高さ一〇〇cm余りの自然石の表裏に仏像が浮彫りにされている。土地の人は、この石仏を「余野の十三仏」と呼んでいる。仏様が十三体彫られているように思われるが、数えてみると表裏各二十体の仏様が彫られている。この場所は現在の余野遊仙寺の前身である涌川寺があった場所であり、いつ頃からこの石仏を「余野の十三仏」と呼ぶようになったのかは不明である。

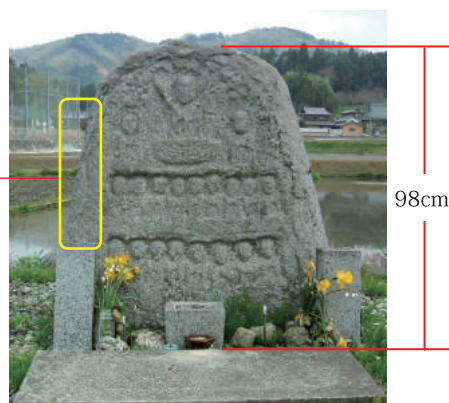
正面上部の三尊は、主尊が錫杖を持った地藏菩薩立像で、両脇侍も合掌立像の地藏菩薩である。下半部には地藏立像が上段九体、下段八体が並んでいる。裏面も同じく上半部は三尊像で下半部には上段八体、下段九体の地藏立像が彫られている。板碑の左側面に次の刻銘がある。

本願 道清
永禄七年
二月時將日

道清の造立で、同行十七人の後生安樂を願った逆修仏である。室町末期の当地の民間信仰をうかがうことができる



本願 道清
永禄七年
二月時將日



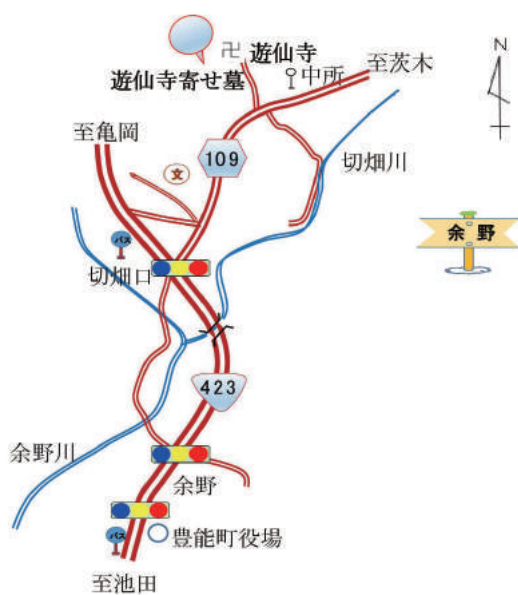
余野遊仙寺寄せ墓

分類 寄せ墓
年代 文和四年（一三五五）
所在 余野遊仙寺



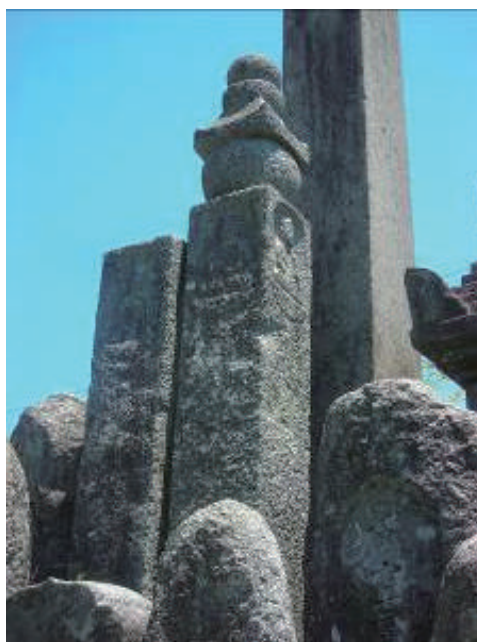
寄せ墓は、遊仙寺の境内にある。昭和三〇年頃に余野地区内の各所に散在していた無縁の石塔や石仏を、供養のため寺の境内に集め、約二〇〇基を数段の四角錐状に並べ上げたものである。これらの石仏石塔は広い地域から集められたので大変バラエティーに富んでいて、南北朝から明治期のものである。内容も真言密教から浄土宗へ、更には縁故信者の各宗派のものにまで及んでいる。

これらの中で注目されるものは、四基ある宝篋印塔である。その中で、基礎のみ残っているものに、文和四年（一三五五）の年号がある。他の一基も南北朝の様式のものであるが、基礎部に「木道恵南上人」と刻まれている。寺の記録によると木道恵南上人は江戸時代の同寺の住職であり、塔の形式と時代が合わないのが疑問である。残り二基の宝篋印塔も室町期の特徴をそなえている。



余野遊仙寺寄せ墓（一石五輪卒塔婆）

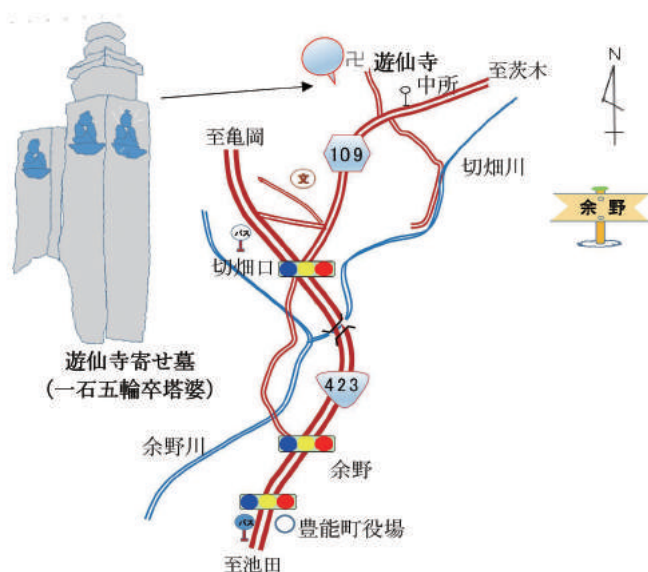
分類 五輪卒塔婆
年代 応安六年（一二七三）
所在 余野遊仙寺



境内にある寄せ墓の上段に、西を向いて二基の一石五輪卒塔婆が建てられている（一基は上部欠損）。延石状に切り出し一材彫成され、卒塔婆のように基部が長い。この種のもものは一般的には五輪卒塔婆と呼ばれる。

石柱（地輪）の四面上部に四方仏と応安六年二月十八日（一二七三）の年号が刻まれている。石造美術では方形の地輪・円形の水輪・三角の火輪・半月型の風輪・団形の空輪からなる。仏教では「地・水・火・風・空」で表すのが一般的である。

密教系の塔では、基礎の各輪四方に梵字や仏像を刻む供養塔が一般的である。この五輪卒塔婆は地元産の石英閃緑岩（花崗岩製）で造られている。先端から基礎までの高さは二二七cmある。残念ながら元の場所とは分かっていない。無銘でいつ頃のものかは定かでないが、様式からして室町時代後期（戦国時代）のものと推定される。町内では最古・最大の「一石五輪卒塔婆」である。



余野の旧池田・亀岡街道の道標

分類 道標
年代 嘉永二年（一八四九）
所在 余野

（町立郷土資料館敷地内）



本部（現池田市木部町）から伏尾・止々呂美を経て余野に至る池田街道は、余野で大阪と亀岡を結ぶ亀岡街道に接続する交差点に建てられていたものである。平成五年頃、豊能町立郷土資料館の敷地内に移された。刻銘は下部の一部を欠いているが、大部分は読みとれ、建てられた嘉永二年（一八四九）の交通状況の一端が知られる。なお、亀岡街道の起点は大阪（高麗橋東詰北側）、明治九年（一八七六）十二月に設置された。

（正面）
右 妙見山
左 みのかちわうじ池田

すぐ みの山からかちをうじ
いけだ 大坂十三

（右面）

左 上ま起 御祖師
た流みく爾ミふく井

右 上ま起 御祖師 大阪
たるミ丹見ふく井

（左面）

すぐ 妙見山

（裏面）

嘉永二巳酉年五月中旬
南無妙法蓮華經

堂 願主
かさ幸
世話人
島 奈か仁

「すぐ」はまっすぐの意、「妙見山」は能勢妙見宮、「みの山かちをうじ」は箕面山勝尾寺、「上ま起」は、上牧、「た流みく爾ミふく井」は多留見、国見、福井である。

